

2023年度五島焼八本木窯跡発掘調査概要報告

The Report of the Excavation of Happongi kiln in Goto islands (2023)

野上 建紀
渡辺 芳郎
賈 文夢
椎葉 萌
古賀新之助
中村 駿斗
藤田 史歩
三池 温大

Nogami Takenori
Watanabe Yoshiro
Jia Wenmeng
Shiiba Moe
Koga Shinnosuke
Nakamura Hayato
Fujita Shiho
Miike Atsuhiro

2023年度五島焼八本木窯跡発掘調査概要報告

野上 建紀¹
渡辺 芳郎²
賈 文夢³
椎葉 萌⁴
古賀新之助⁴
中村 駿斗⁴
藤田 史歩⁴
三池 温大⁴

The Report of the Excavation of Happongi kiln in Goto islands (2023)

Nogami Takenori
Watanabe Yoshiro
Jia Wenmeng
Shiiba Moe
Koga Shinnosuke
Nakamura Hayato
Fujita Shiho
Miike Atsuhiro

In the late Edo period, porcelain production began in the Goto Islands to the west of Kyushu. 5 kiln ruins had been discovered on Fukue Island. Nagasaki University began an archaeological survey of these kiln sites in 2016. From 2018 to 2021, we had excavated at Tanoe kiln site, and have excavated at Happongi kiln since 2022. This report is a report of the excavation survey of Happongi kiln conducted in 2023.

According to old records, Happongi kiln began producing porcelain in 1805 by inviting potters from Takahama in the Amakusa region. An old map show us porcelain production space in those day. During excavations, a climbing kiln that produced porcelain was

¹ 長崎大学多文化社会学部・教授

² 鹿児島大学法文学部・教授

³ 長崎大学大学院多文化社会学研究科博士後期課程

⁴ 長崎大学多文化社会学部社会動態コース

discovered. However no walls or floors of the firing chamber remain. Only the baked clay surface beneath the floor has been discovered.

キーワード：肥前、五島、福江島、登り窯、磁器

Hizen, Goto islands, Fukue island, climbing kiln, porcelain

1. はじめに

九州島西方に位置する五島列島最大の島である福江島では、近世後期になると陶磁器生産を始めた。福江島は福江藩領と分知された富江領（富江藩）からなるが、いずれの領内でも生産が行われていた。肥前本土や天草地方から技術を導入して始まったものである。島内には複数の登り窯跡が確認されているが（図1）、考古学的な調査はほとんど行われていなかった。

そこで長崎大学多文化社会学部は、五島焼の概要を明らかにするために、五島焼に関する考古学的調査を2016年度より開始した。本調査もその一環であり、今年度で8年目を迎える。

2. 五島焼の窯の系譜（野上2020、野上・賈・椎葉2023）

福江島での陶磁器生産は18世紀後半に始まったと推定される。『五島編年史』の明和4年（1767）の項には、「大村領ヨリ陶師来り、福江小田ニテ焼物始マル、然モ永続セズ」（『鵜山君御直筆御日記』）とある（中島1973）。「福江小田」は現在の五島市大荒町に位置している。近世期は福江藩領内である。陶器生産を行っていたのか、磁器生産を行っていたのか、不明であるが、大村領の陶師が波佐見か長与の陶工とみられることや天和2年（1682）の「御掟書」には勝手に売り捌くことを禁じた特産品の一つとして「焼物土石」と書かれていることから、磁器生産であった可能性が高い。なお、2022年の現地踏査では焼土が確認されている。

続いて富江領では19世紀初めに天草の高浜焼の技術を導入して磁器生産を始めている。天草高浜の上田家に残る『上田家文書』には、文化2年（1805）に高浜の上田礼作（禮作）、五太夫らが招聘されて窯を築いたことが記されている。文化9年（1812）には休止し、同11年には礼作らも天草に帰っていることが記録等にあり、短期間のみ操業された可

能性が高い窯である。この窯については富江の市街地から内陸に入った盆地にある繁敷の集落近くの八本木窯と推定している（図2、野上2020）。昨年と今回、発掘調査を行った窯である。その姿は後述する古地図にも描かれている（図3）。

そして、この八本木窯に続いて、山内窯（五島市岐宿町）や田ノ江窯（五島市富江町）などの窯が築かれ、それぞれ磁器を焼いている。確実に明治期まで継続した証拠はなく、おそらく幕末期に廃窯となったものとみられる。

3. 2022年度以前の調査（野上・賈・椎葉2023）

八本木窯跡は五島市富江町繁敷字カニ畑546番地に位置する（図4）。窯体のある土地の地目は田であるが、現況は山林となっている。山林を開いて窯を築き、廃窯となった後に再造成して水田等として利用し（図5）、その後、耕作放棄地となり、再び山林となったとみられる。旧水田の石垣には窯壁片や焼土片が見られる。

前に触れたように八本木窯については、天草高浜の上田家に残る「文化七年記 五嶋富江 繁敷 八本木」の絵図にその姿が描かれている（図3）。「皿山」、「窯」、「窯神」、「役所」、「スヤキ」など各施設が「八本木山」の麓に描かれている。その他、上田禮作が滞在していたとみられる民家（図6）も描かれている。当時の窯場空間を知る上で貴重な資料となっている。

3.1 踏査および測量調査

最初に八本木窯跡（図7・8）を訪れたのは、2008年のことであり、窯体のある土地に隣接した水田ではまだ耕作が行われていた。山林の中にあっても比較的容易に地表に露出している窯壁を発見することができた。

次に訪れたのは2017年のことであり、耕作が行われていた隣接する水田も耕作放棄地となっていた。二度の踏査でようやく窯壁を再確認し、その夏に測量調査を実施した。その結果、おおむね東から西へと上る登り窯であることがわかった。また、焼成室1室の両側の側壁と奥壁の一部を確認し、焼成室横幅が約6.7mであることも確認できた。

3.2 採集遺物調査

富江歴史民俗資料館には、八本木窯跡の採集遺物が保管展示されており、2016年にその

調査を行った。遺物は製品のみで窯道具は含まれていない。碗、皿、蓋物、仏飯器などがある。碗は丸碗、広東碗などがある。広東碗の蓋とみられるものもあり、内面中央に「八本」の文字を図案化したものが書かれている。端反碗は含まれていない。皿は丸皿であり、見込み蛇の目釉剥ぎしたものがある。高台には丸高台と蛇の目凹形高台がある。製品の生産年代は18世紀末～19世紀前半の範囲内とみられ、文献史料から推定される生産年代と矛盾しない。

3.3 2022年度発掘調査

続いて2022年に初めての発掘調査を行った。2017年度の調査時と比較して、さらに草の繁茂が著しく、現地には到達するのも困難な状況であったが、五島市シルバー人材センターによる草刈りによって現地に入ることができた。

3.3.1 検出遺構 (図9)

現地表面に窯壁が露出している焼成室が最上室とみられたため、最上室から下へ順に、第1室、第2室、第3室・・・とよぶことにし、主として第1室の規模と構造を確認するための試掘調査を行い、窯壁や床面を検出した。その結果、第1室の北側の側壁が最大約110cmの高さまで遺存していることがわかった。奥壁部分では煙出しの基部とみられる遺構面が検出されたが、上部構造が残っておらず、詳細な構造は不明である。また、南側の側壁付近でも奥壁を地表面に確認することができ、温座ノ巢の基部を確認した。分炎柱と分炎柱の間(通炎孔)に窯道具の円形ハマが張り付けられ、熔着していた。

北側の側壁の下方への延長線上に床境を確認した。床境の高さは約30cmであり、奥行から床境までの距離、すなわち、砂床の奥行は3.1mである。

また、焼成室の横幅については、2017年度の測量調査のとおり、6.7mを計測したが、焼成室の下方は削平されており、焼成室全体の奥行については不明である。しかし、さらに下方の崖の段差の部分に第3室の奥壁の一部の可能性のある窯壁が確認できた。この窯壁が第3室の奥壁であれば、2室分の奥行が約9.5mとなるので、一つの焼成室の奥行は平均4.7mとなる。

3.3.2 出土遺物

出土遺物には、製品と窯道具がある。製品は全て磁器である。器種は碗、皿、蓋物の蓋、

瓶などがある。碗は染付と白磁であるが、小片が多く、製品全体を白磁であると断定できるものはない。碗は内面蛇ノ目釉剥ぎのもの、皿は蛇ノ目凹形高台のものを含む。窯道具は、ハマとトチンがある。いずれも陶質である。ハマは、薄手の円形ハマ、厚手の円形ハマ、そして、チャツに似た逆台形ハマなどがある。

4. 2023年度の調査

4.1 調査の目的

今回の調査の目的は2022年度に発掘調査によって検出した登り窯の位置、規模、方向、遺存状態を把握し、基礎資料を収集することである。

4.2 調査体制

①調査主体

長崎大学多文化社会学部・野上建紀研究室

②調査責任者

野上建紀（長崎大学多文化社会学部・教授）

③調査参加者（図25・26）

賈文夢（長崎大学大学院多文化社会学研究科博士後期課程1年）・田中正幸（同研究科博士前期課程1年）・山下輝・椎葉萌・古賀新之助・中村駿斗（以上、長崎大学多文化社会学部4年）・藤田史歩・野下遥路（以上、同学部3年）・三池温大・杉本駿・末廣万葉（以上、同学部2年）

④調査指導

渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部・教授）

4.3 調査内容（図10）

2022年度の発掘調査で検出した第1室（図11）の焼成室の奥壁から約10m下方にある段差の下の平坦地にトレンチ（Dトレンチ）を設定した（図12・13）。第1室の側壁の延長線上にあたる場所である。発掘の結果、焼成室の床下とみられる焼土面が検出された（図15・16）。焼土面は北端部を除いて、トレンチ全面に広がっている。明確な焼土面が見られない北端部については、掘削によって消失しているためか、あるいは窯の外側であるた

めか、理由は明確ではない。検出された土層は、上から暗褐色土の表土層（1層）、遺物を少量含む黄赤褐色土層（2層）が堆積しており、その下は粘性があり、締まりもある赤褐色土層（3層）である。2層が水田造成土、3層が焼成室の床下とみられ、床面はすでに削平されてしまっている。Dトレンチ内にサブトレンチ（図17）を入れて、掘り下げて地山を検出した。

さらにDトレンチの南側にトレンチ（Eトレンチ）を設定し（図14・18）、一部サブトレンチを入れた（図19）。サブトレンチでは暗褐色土の表土層（1層）、遺物を少量含む黄赤褐色土層（2層）の下に、窯壁片や焼土を大量に含む赤褐色土層、炭を多量に含む黒色土層が検出されている。さらにその下は焼土が混じる黄褐色土が検出されている。

その他、第2室と第3室の間の段差付近に奥壁の可能性をもつトンバイ（耐火レンガ）の積み重なりが露出していたため、このトンバイの積み重なりが窯壁であるかどうかの確認を行った。その結果、奥壁と床面が遺存していることがわかった（図20・21）。

4.4 調査成果

今回の調査で検出された遺構は、崖に露出している窯壁と焼成室床面（砂床）とDトレンチで検出された焼成室の床下とみられる焼土面である。位置から推測すると、窯壁と砂床は第3室のもの、床下の焼土面は第4室のものとみられる。第3室は崖の内部を除いて、大半が破壊され、消失しているとみられる。第4室についても奥壁、側壁、床面いずれも削平を受けて、大半が失われていると思われる。

第1室と第3室の床面の高低差は約2mであり、1室あたりの段差は平均約1mである。第3室の床面とDトレンチで検出された焼土面の高低差が約1m10cmであるため、奥壁を含め、床面も削平されているとして矛盾はない。

また、発掘調査による成果ではないが、八本木窯の上方にあったとみられる「窯神」の可能性のある石を確認した（図23）。「窯神」は『上田家文書』の古地図にも描かれているが、現況では確認できていなかった。しかし、数十年前までは不定形の石（自然石か）が祀られていたことを当時の写真で確認することができた。写真が鮮明なものではないため、細部まで一致することを確認できたわけではないが、外形が非常に類似している石が横倒しになっていることを確認した。

遺物は、陶磁器片と窯道具が出土している（図24）。焼成室の床下の遺構が残るのみであり、後の水田耕作で陶磁器片などを除去しているため、量は少ない。磁器は染付、白磁

があり、器種・器形がわかるものは碗、皿である。碗は広東形碗、皿は蛇ノ目凹形高台をもつものを含む。陶器の碗あるいは碗蓋が出土している。胎土は褐色であり、焼成不良の磁器ではない。その他、陶器質あるいは磁器の焼成不良とみられる碗があり、外面には削りによる鏽が入っている。

窯道具はトチン、ハマ、チャツ、シノ（ナンキン）などがみられる。トチンとシノは陶器質、ハマは磁器質である。ハマの中にいわゆる「雨垂れ痕」とみられる痕跡をもつものがあつた。

遺物の年代は19世紀前半頃とみられ、これまでの八本木窯の製品の年代観からはずれるものではない。

5. 今後の課題と計画

今回の発掘調査によって、登り窯のおおよその方向を知ることができたが、想定していた以上に水田造成による影響が大きく、下方に行くにしたがい、窯の遺存状態がよくないことがわかった。地形を考慮しながら窯のおおよその遺存状態を推測してトレンチを設定していく方法では限界があると考え。今後、詳細な地形測量を行った上で、地形の断面と窯の想定縦断面を丁寧に重ね合わせながら、ピンポイントにトレンチを設定したいと考えている。

そして、窯の位置、範囲を判明させて、『上田家文書』の古地図に描かれている窯以外の施設についても発掘調査によって明らかにしていきたいと思う。

本調査を行うにあたり、多くの人々や機関のご協力を得た。芳名を記して謝意としたい。山下與一（土地所有者）、野口博文（繁敷町内会長）、小田昌弘（五島市地域振興部）、尾崎克厚（五島市役所富江支所長）、出口健太郎（五島市文化観光課）、春野太一（五島市シルバー人材センター）、五島市、五島市役所富江支所、旅館わらじ舎、一平、さんさん富江キャンプ村（順不同、敬称略）

本研究は、JSPS 科研費22H00688の助成を受けたものである。

引用・参考文献

下川達彌2001『土と炎の里 長崎のやきもの』

中島功1973『五島編年史』国書刊行会

野上建紀2017「五島列島福江島の田ノ江窯跡に関する測量調査ノート」『金沢大学考古学紀要』38号 pp.47-58

野上建紀2018「五島焼の窯跡と製品について：2016・2017年度の調査から」『金沢大学考古学紀要』39号 pp.13-35

野上建紀2020「近世五島焼の基礎的研究」『東洋陶磁』49号 pp.35-62

野上建紀（編著）2022『五島焼・田ノ江窯跡発掘調査報告書－陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（Ⅱ）』長崎大学多文化社会学部

野上建紀・大橋康二・渡辺芳郎・中野雄二・溝上隼弘・グエン ティ ラン アイン2019「福江島・田ノ江窯跡発掘調査概要報告（2018）」『金沢大学考古学紀要』40号 pp.55-76

野上建紀・渡辺芳郎・中野雄二・溝上隼弘・グエン ティ ラン アイン2020「福江島・田ノ江窯跡発掘調査概要報告（2019）」『金沢大学考古学紀要』41号 pp.41-58

野上建紀・賈文夢・椎葉萌2023「近世の窯場空間の復元的研究－2022年度五島焼八本木窯跡調査報告－」『金沢大学考古学紀要』44号 pp.47-65

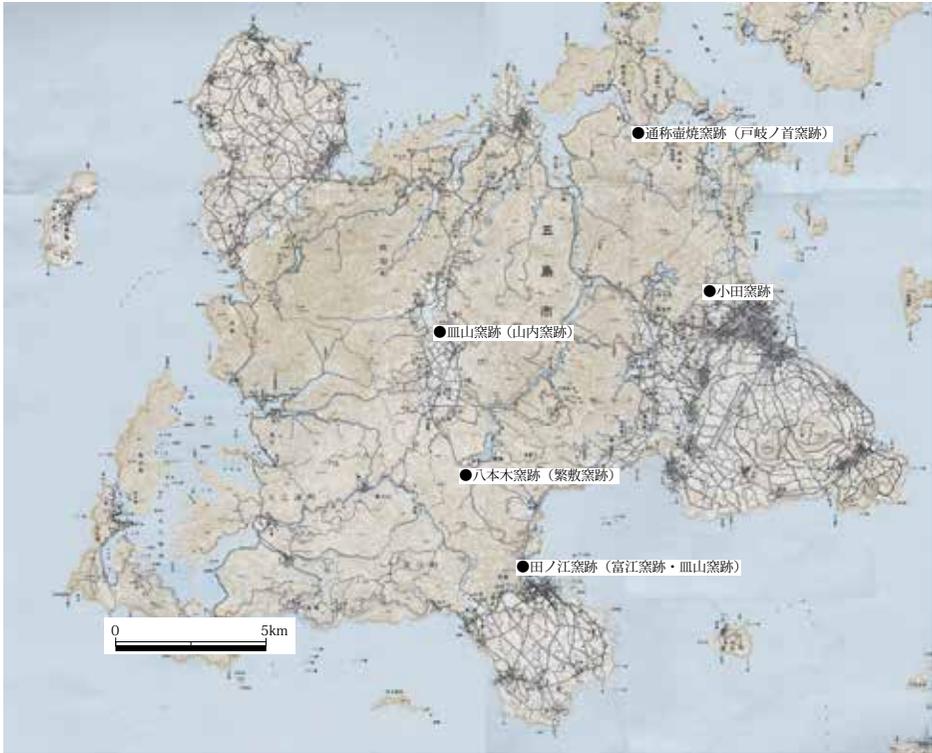


图1 福江島古窯跡分布図(野上 2017)



图2 田ノ江窯跡・八本木窯跡位置図(野上 2017)

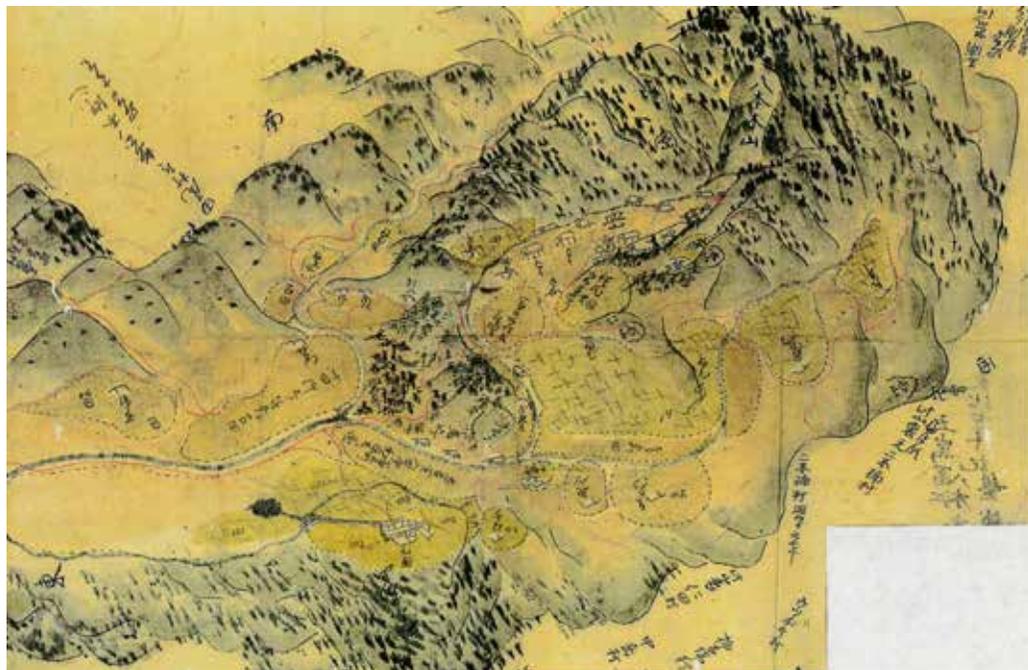


図3 『八本木山絵図』(下川 2001)



図4 八本木窯跡周辺地形図



図6 「禮作」付近の石垣



図5 八本木窯跡付近航空写真(国土地理院 1977.10.15 撮影)



図7 八本木窯跡遠望(北東から)



図8 八本木窯跡近景(北東から)

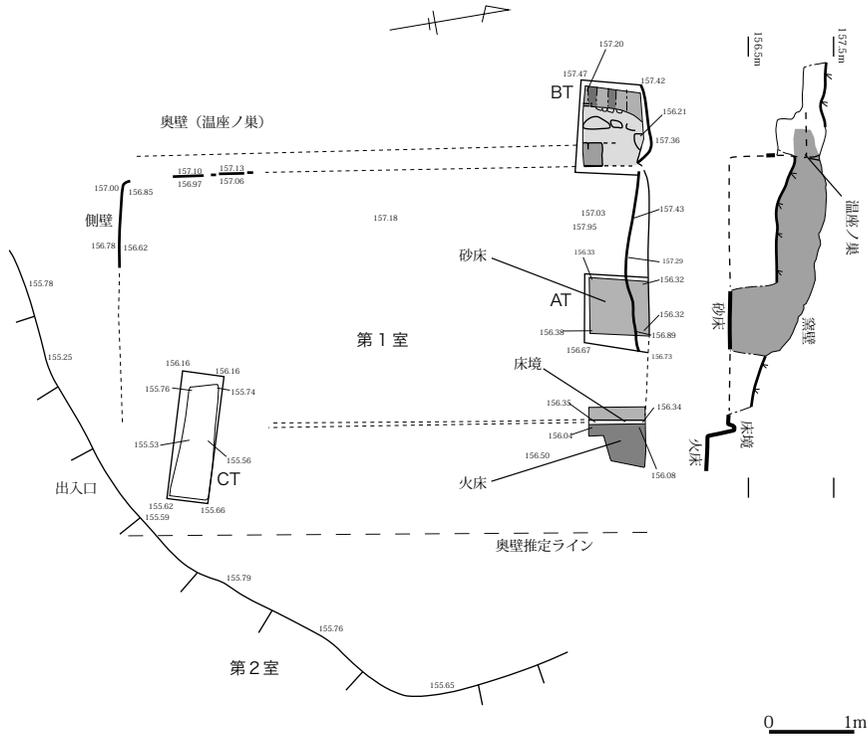


図9 八本木窯跡第1室・第2室平面図・縦断面

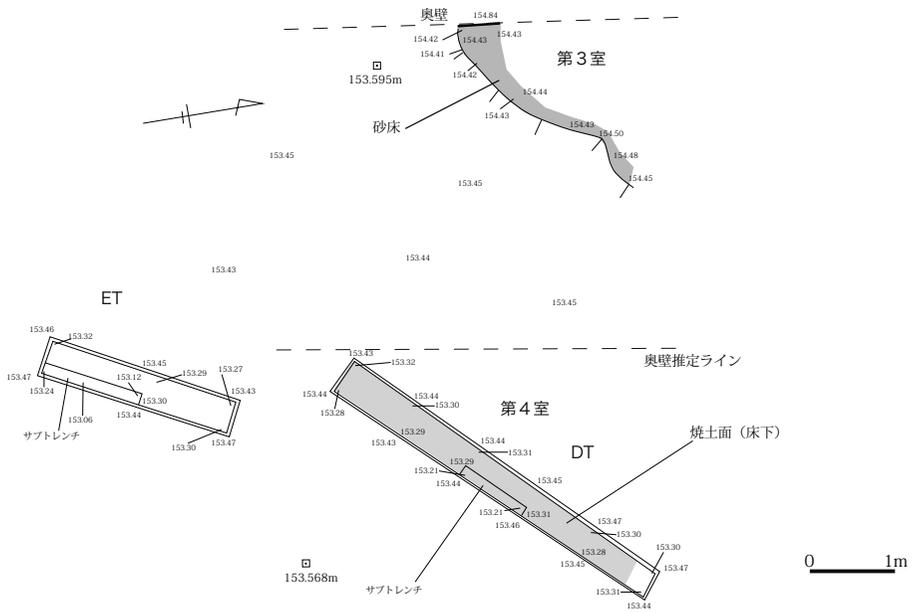


図10 八本木窯跡第3室・第4室平面図



図11 八本木窯跡第1室（西から）



図12 八本木窯跡Dトレンチ設定風景（北から）



図13 八本木窯跡Dトレンチ発掘風景（南から）



図14 八本木窯跡Eトレンチ発掘風景（南西から）



図15 八本木窯跡Dトレンチ検出焼土面（北東から）



図16 八本木窯跡Dトレンチ検出焼土面（西から）



図17 八本木窯跡Dトレンチ内サブトレンチ（北西から）



図18 八本木窯跡Eトレンチ（北から）



図19 八本木窯跡Eトレンチ内サブトレンチ（西から）



図20 八本木窯跡第3室奥壁および砂床（東から）



図21 八本木窯跡第3室奥壁および砂床（東から）



図22 八本木窯跡第3室・第4室付近測量風景（東から）



図23 八本木窯跡「窯神」（東から）



図24 八本木窯跡出土遺物



図25 八本木窯跡発掘調査参加者



図26 八本木窯跡発掘調査参加者

